The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦国楚簡研究の現在　目次・序言・凡例
Author(s)	戦国楚簡研究会
Citation	中国研究集刊. 2003, 33, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61063
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

戦国楚簡研究の現在

戦国楚簡研究会

目　次

【郭店楚墓竹簡関係】
郭店楚簡総論……4
郭店楚簡各篇解題
1．『老子』……6
2．『太一生水』……10
3．『緇衣』……12
4．『魯穆公問子思』……15
5．『窮達以時』……17
6．『五行』……20
7．『唐虞之道』……22
8．『忠信之道』……26
9．『成之聞之』……27
10．『尊徳義』……30
11．『性自命出』……33
12．『六徳』……36
13．『語叢一』『語叢二』『語叢三』……38
14．『語叢四』……43

【上海博物館蔵戦国楚竹書関係】
上博楚簡総論……46
上博楚簡各篇解題
1．『孔子詩論』……49
2．『紂（緇）衣』……53
3．『性情論』……55
4．『民之父母』……57
5．『子羔』……59
6．『魯邦大旱』……61
7．『従政　甲・乙篇』……63
8．『昔者君老』……67
9．『容成氏』……68

【附録】
郭店楚簡・上博楚簡の字体と形制……72
郭店楚簡形制一覧……77
上博楚簡形制一覧……78
「書誌情報」用語解説……79

序言

中国古代思想史研究は、大きな転換期を迎えている。通説に重大な影響を及ぼす大量の新出土資料が近年相次いで発見されているからである。

振り返れば、一九七〇年代には、銀雀山漢墓竹簡・馬王堆漢墓帛書・睡虎地秦墓竹簡などが出土し、古代思想史研究は大きな展開を遂げた。銀雀山漢墓竹簡は、二つの『孫子』を初めとする兵学思想研究の進展に寄与し、馬王堆漢墓帛書は、『老子』や黄老思想の新研究を推し進め、睡虎地秦墓竹簡は、秦の法治の実態について重要な手かがりを与えてくれた。

そして、近年その公開が始まった戦国時代の楚簡群は、これらを凌ぐ大きな衝撃を学界に与えている。一九九三年には、湖北省荊門市郭店一号楚墓から戦国時代の竹簡が出土し、その翌年には、上海博物館が同様の戦国楚簡を入手した。それぞれ「郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）」「上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）」と総称されたこれら新出土資料は、戦国時代の古文字で記されており、そこには、『周易』『詩経』『礼記』『老子』など伝世の主要な古典と密接な関係を有する諸文献の他、儒家系・道家系などの知られざる思想文献が大量に含まれていた。

これらの解読が進めば、中国古代思想史研究にとっては無論のこと、東洋史学・古文字学・中国文学など周辺領域の研究にとっても、画期的な状況をもたらすこととなろう。

本稿は、こうした状況を踏まえ、「郭店楚簡」と「上博楚簡」の概要を紹介し、新出土資料研究の基盤整備を進めようとするものである。編者となっている「戦国楚簡研究会」とは、一九九八年十月、有志により結成された研究会で、当初は、郭店楚簡の解読を共同で進めていたが、二〇〇〇年度からは、科学研究費補助金（研究課題名「戦国楚系文字資料の研究」、研究代表者・竹田健二）の交付を受け、その後に公開された上博楚簡をも対象に含めて研究会合を重ねている。本稿は、そのメンバーである浅野裕一・湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・菅本大二の分担執筆による。分担ごとに作成した草稿を持ち寄り、それを全員で検討した上で定稿とした。なお、分担者名は各項の末尾に記した。

凡例

一、本稿は、『郭店楚墓竹簡』（荊州市博物館、文物出版社、一九九八年五月）、および『上海博物館蔵戦国楚竹書』（馬承源主編、上海古籍出版社）第一分冊（二〇〇一年十一月）、同・第二分冊（二〇〇二年十二月）に収録された新出土資料について、戦国楚簡研究会の研究成果を踏まえて解説を施すものである。

二、資料解題は、郭店楚墓竹簡の部と上海博物館蔵戦国楚竹書の部とに大別した上で、それぞれ総論に続いて資料ごとの解説を記す。なお、それぞれの資料群の呼称については、各々「郭店楚簡」「上博楚簡」と略記する。

三、各資料の解説は、（1）書誌情報、（2）内容と研究概況、（3）主要釈文・注釈・研究、から成る。但し、『上海博物館蔵戦国楚竹書』第二分冊所収資料については、公開されたばかりであるので、概ね（1）（2）の記載に止める。

四、（1）の書誌情報に関する専門用語については、後掲の「書誌情報用語解説」を参照。また、簡長・編綴間などの長さの単位はcmである。

五、（3）の資料の内、各資料に共通する釈文・研究書などについては、本号所収の「新出土資料関係文献提要（一）」（佐野大介・前川正名・上野洋子）参照。

六、「戦国時代」の開始年については諸説があるが、本稿では便宜上、紀元前四〇三年説を採用する。紀元前二二一年の秦帝国成立までの一八〇年間を三等分し、紀元前四〇三～三四三年を「戦国前期」、紀元前三四二～二八二年を「戦国中期」、紀元前二八一～二二一年を「戦国後期」と称することとする。

なお、郭店楚墓の墓葬年代（造営時期）について、『郭店楚墓竹簡』は「戦国中期偏晩」と説明している。但し、上海博物館は戦国期の時代区分について、「戦国早期」「戦国晩期」の二分法を採る。従って、その場合の「戦国晩期」とは、本稿における「戦国後期」と同義ではない。上海博物館元館長馬承源氏の見解によれば、上博楚簡の成立時期は、むしろ本稿における「戦国中期」に相当する（詳細は本稿「郭店楚簡総論」「上博楚簡総論」参照）。